

男の心意気や誇りを示すこと。すなわち、マチスモ(Machismo)。マチスモを実践する男は、マッ

チヨとも呼ばれる。マチスモには「男は女よりエライ」と信じる男の威張りちらし」という側面もあるが、女にとってウザ苦しいそんな要素は、フェミニズムがとうに淘汰してくれたはずだ。

問題は、男に優しさが求められるあまり、魅力的な男っぽさとしてのマチスモの要素までしょぼくなってしまうこと。一緒にケーキバイキングに行ってくれる男など、いない。女が女として輝くためにも、もっとテストステロン(男性ホルモン)香をすがすがしく放つ男が増えてもよいのではないか。

増やし育てるには、ほめるのがいちばん。威張りちらしに走らず、男ならではの心意気や誇りをポジティブに示し、周囲にも好ましい影響を与える男たち。そんな21世紀型マッチヨをほめたまえ。たいけれど、いったいどこに行ったら会えるのか? ひよっとしたら、女が足を踏み入れられない男の聖域で、のびのびと盛り上がりたいたりするのだろうか?

たとえば、このイベントはじつだ。イタリアのヴェローナで毎年開催されている、ヴェイニタリー(Vinitaly)。クオリテイの高いワインの国際的な見本市である。今年4月の見本市の写真には、出品したワインの前に笑しげに肩を組む男たちの姿が見えるが、ややつ、その中の一人は、プレミアム・カジュアルブランド「ディーゼル」の社長、レンツォ・ロッシ氏ではないか! ロッシ氏、なんとイタリア北東部に

100ヘクタールにおよぶファームを購入して、ワインやオリブオイルを生産していたのである。

ビジネスで成功をおさめた男が所有したがる(サクセスの象徴)には、ヨットだの競争馬だのがあるが、だんぜんマッチヨ度が濃いのは、ワイナリーかもしれない。土とかかわりながら

多くの人を巻き込む事業だし、ぶどうの収穫が天候に左右されるといいうキャンブルめいたスリルもある。さらにヨーロッパでは、ワイナリーの所有は、貴族の伝統を連想させる



ことも多い。ちなみに、シャネル社のオーナー、ヴェルメーユ家は、長い歴史を持ちながら資金不足のため低迷していたホルドーの「シャトー・ローザン・セグラ」を所有することで、このワインの名声を復活させ、社会からの尊敬を集めている。

大地への夢や冒険スピリットを試され、社会的プライドも大満足な格の高い事業、それがワイナリー経営というわけか。しかも、ロッシ氏、ワインづくりの技術的サポートをするコンサルタン

んでいるのだが、実はこの二人、同郷で友人同士。情熱を共有する同郷の友人と、わいわいワインづくり。こんなホモソシヤル(男同士の絆)な美しき関係も、うっとりもの。



1.ディーゼル・ファーム製のワイン。さすがのボトルデザイン。
2.イタリア北東部マロスティカにある広大なディーゼル・ファーム。
3.ヴェイニタリー会場で、元サッカーイタリア代表のロベルト・バッジョとイタリア人気TVタレント、アンドレア・ペッツィに囲まれたレンツォ・ロッシ。

Andrea Pezzi

トに、ロベルト・チプレッソ氏を選

Sanctuary of the Lost Samurai

中野香織の
“落日のマッチヨ”

女が足を踏み入れられない男の聖域はワイナリー?

パワーウーマンの元気な姿の脇で影が薄くなって行く男たち。でも、どこかに私たちがうっとりさせてくれる男がいるはずだ。編集部は、そんな彼らを探し出し、パザーウーマンからの認定マークを授けることにした。

Text: Kaori Nakano

Renzo Rosso

Roberto Baggio



3

中野香織

服飾史家・コラムニスト。1962年生まれ。東京大学文学部および教養学部卒業。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得。英国ケンブリッジ大学客員研究員を経て文筆業に。著書に『モードの方程式』(新潮社)、『スーツの神話』(文春新書)などがある。